# 戦時下における対人援助としての慰問文

Wartime Letters of Consolation as a Form of Interpersonal Support

八田　友和

HATTA Tomokazu

公益財団法人こども財団

Kodomo Foundation, Public Interest Incorporated Foundation

Key words: 対人援助、慰問文

## 研究の背景と目的

本研究の目的は、任意団体こもれび博物館が所蔵する南支派遣軍として出征した兵士（兵士A）に贈られた慰問文約160通の分析を通して、戦時下における対人援助としての慰問文について考察することにある。

## 慰問文の定義と先行研究

慰問文とは、「戦時下において、戦地等に赴いた兵士に対し、家族・親族・知人・学校関係者などが、相手の安否を気遣い、励ましや慰め、身近な出来事の伝達などを目的として送った手紙」と定義することができる。

慰問文（恤兵部の慰問政策含む）の先行研究としては、押田2023や橋本2025などが確認できる。押田の論考では、軍部の慰問部署である陸軍恤兵部の慰問政策を検討、考察している。橋本の論考では、皇軍慰問を目的とした慰問文が学校教育においてどのように指導されているか整理している。このように、慰問政策や現場での慰問文の運用や指導に着目した研究は一定数確認できる。しかしその一方で、慰問文を対人援助の視点から分析・整理した研究は、管見の限りではあるが確認できなかった。そこで本研究では、慰問文約160通を対象に、対人援助の視点から分析・整理を試みる。

## 調査の概要と分析結果

**分析対象**：南支派遣軍として出征した兵士（兵士A）に贈られた慰問文約160通を分析対象とした。

**分析方法**：まず、慰問文を1つずつ精読し、文字起こしをおこなった。次に、文字起こしをした慰問文の基本情報（差出人に関する情報、差出年月日）を整理し、対人援助に関わる「励まし」「無事祈願」「感謝」「共感」「気遣い」「近況報告」の6コードを設定した。そして、慰問文が“戦時下”という特殊な状況で執筆されたことを踏まえて、「愛国心」や「戦争協力」に関するコードを加え、合計7つのコードに基づき確認・分析を行った。

**分析結果**：慰問文約160通のうち、「近況報告」が156通（96.3%）、「気遣い」が146通（90.1%）、「励まし」が138通（85.2%）、「無事祈願」が135通（83.3%）、「愛国・戦争協力」が141通（87.0%）、「共感」が97通（59.9%）、「感謝」が56通（34.6%）確認できた。特に、「元気でいて下さい」「身体を大切に」といった無事・健康への配慮、「頑張って下さい」「奮闘を祈る」などの励ましに加え、学校・仕事・家族・季節などの近況を伝える記述が多くみられた。また、「御国のために戦って下さい」「武運長久」など、戦争遂行への期待や国家への忠誠を示す表現も多数確認された。

また、家族や周囲には打ち明けることのできない悩みや苦しみを記し、戦地にいる兵士Aに相談する事例も確認された。ここから、慰問文は兵士を励まし、気遣うための通信という役割だけでなく、書き手自身が感情や悩みを表現し、他者とのつながりを確保する場としても機能していた可能性がある。よって慰問文は「受け手を支える」一方向的な援助ではなく、書き手と受け手の双方に作用する相互的な対人援助の一形態として捉えることができると思われる。

## 考察

慰問文は戦地と国内を結ぶコミュニケーション手段だけではなく、①兵士の不安や孤独を和らげる心理的な支援、②日常生活や近況の報告、感情の共有による書き手と受け取り手の関係維持、③戦時下の価値観を共有・強化する働き、という複数の機能を有していたと考えられる。すなわち、慰問文は「書く」という行為を通して相手とのつながりを維持し、受け手の心理や行動に働きかける対人援助の一形態として位置づけることができるのではないだろうか。

## 今後の展望

慰問文の書き手と兵士Aとの関係性に着目した分析を進めるとともに、軍事郵便や出征時の送辞等の関連資料とも関連付け、戦時下の通信や慰問が果たした対人援助の特徴を検討していきたい。

## 謝辞

本研究を行うにあたって、こもれび博物館から資料等を提供いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

## 引用参考文献

・押田信子「戦時期、陸軍恤兵部の慰問政策ー恤兵部員の足跡を手掛かりにしてー」『中央大学経済研究所年報』第55号，中央大学，pp.159-184，2023年

・橋本萌「戦時下綴方教育における慰問文指導について」『教職研究』第16号，信州大学，pp.36-50，2025年